

浮舟と「数ならぬ」・「身のほど」の意識

——明石の君・中將の君をとおして——

はじめに

浮舟をめぐる「数ならぬ」と「身のほど」の語意を、明石の君と中將の君をとおして詳しく考えたい。

『源氏物語』作中には、女君が男君と自身の身分の差を痛感することが語られる叙述において、しばしば「数ならぬ」との語が見受けられる。これは『源氏物語』作中においては、空蟬、明石の君、宇治の中の君、中將の君などを中心に用例が散見する。ここに浮舟は含まれないのである。

明石の君と浮舟は、共に受領階級の娘として作中に語られている人である。明石の君は前播磨守の娘だが、もとは都の重職を担う貴族の家柄、阿部秋生氏が「名門の血」と述べているとおり、誇り高き血筋である。一方の浮舟は八の宮の娘であるが、大君、中の君の異母妹にあたる。浮舟は父である八の宮の認知を得ることも叶わず、母の再婚相手である常陸守にしたがって、長い間地方で暮らした人として作中に語られている。明石の君と同様、浮

舟もまた受領の家で育ったが、その血筋は高貴な宮家の血を受けた人である。つまりは、明石の君と浮舟は共に「貴種」の血をひく娘なのである。しかし作中においてはその初出から、受領階級に零落した人として語りおこされている。

光源氏の一人娘を産んだ明石の君は、受領の娘である自身を「数ならぬ身」と捉え、また「身のほど」との意識も内包している人として作中に語られている。明石の君をめぐる「数ならぬ」や「身のほど」の語は、彼女の聡明な生き方、身の処し方を表すものであるとの指摘がなされている。

では浮舟はどうか。明石の君と類似する境遇にあつて、薫や匂宮という高貴な男君に対峙する浮舟に関する「数ならぬ」や「身のほど」の語について、その特徴を明らかにしたい。

一 「数ならぬ身」の意識

ここではまず、「数ならぬ」の語をとりあげる。以下に、浮舟が作中に語りおこされる宿木巻以降に散見する「数ならぬ」の語

大竹 明香

の用例、全十一例をあげる。^③

①いかでかは、数ならぬありさまなれば、かならず人笑へに
うきこと出で来んものぞとは、
(宿木⑤三八三)

②げに、心あらむ人は、数ならぬ身を知らでまじらふべき世に
もあらざりけり、
(宿木⑤四二一)

③何ごとも、数ならでは、世の人めかしきこともあるまじかりけり、
(宿木⑤四七九)

④人の御ほどのただ今世にありがたげなるをも、数ならましかばなどぞよるづに思ひける。
(東屋⑥一七)

⑤上達部、親王たちにて、みやびやかに心恥づかしき人の御あたりといふとも、わが数ならではかひあらじ。よろづのことわが身からなりけりと思へば、よろづに悲しうこそ見たてまつれど、いかにして、
人笑へならずしたてまつらむ」
(東屋⑤三六—三七)

⑥数ならぬ身ひとつの蔭に隠れもあへず、あはれなることの多くはべる世なれば、頼もしき方にはまづなん。(東屋⑤三九)

⑦かの過ぎにし御代りに尋ねて見んと、この数ならぬ人をさへなん、かの弁の尼君にはのたまひける。(東屋⑤四七—四八)

⑧数ならぬ身に、もの思ひの種をやいと蒔かせて見はべらん。高きも短きも、女といふものはかかる筋にてこそ、
(東屋⑤五六)

⑨年ごろは、心細きありさまを見たまへながら、それは数ならぬ身の怠りに思ひたまへなしつつ、
(蜻蛉⑤三三九)

⑩また数ならぬほどは、なかなかいと恥づかしくなむ、人に何ゆゑなどは知らせはべらで、
(蜻蛉⑤二四一)

⑪「あはれ知る心は人におくれねど数ならぬ身にきえつつぞふる」
(蜻蛉⑤二四五—二四六)

①は匂宮と夕霧の娘六の君との婚約を聞いた中の君の心内語で、自らを「数ならぬ」身であると比定し、「人笑へ」となることへの危惧が語られている。この「数ならぬ」と「人笑へ」の意識は、明石の君においても確認できるものである。

②は、匂宮の夜離れが続く、思い悩む中の君の心内語である。ここにおいても「数ならぬ身」とは、中の君自身のことである。

また③は薫の大君への思いを知った中の君の心内語である。①②③は、匂宮と中の君、また薫と大君をも含めた身分差を表す語として、「数ならぬ」の意識が語られているといえよう。

④から⑩までは、中の君の異母妹である浮舟に関する用例である。浮舟の人物造型については、秋山虔氏が「浮舟登場の経過は、その母中将の君の運命と密接にからみつつ、それ自体がきわめて独特な世界を形成している」と指摘し、これに続いて鈴木日出男氏は「自ら固有の性格なり思想なりを賦与された存在として造型されてはいない。独自の意思にもとづいて生きようとはしない」と述べる。また高田祐彦氏は、浮舟の母中将の君に関する「数ならぬ」の語について、彼女の身分意識を端的に表しているものであると捉える。以下に、浮舟に関する「数ならぬ」の語について詳しくみていきたい。

④は東屋巻の巻頭である。薫のような高貴人が我が娘浮舟に興味を抱いていることに期待を抱きながらも、「数ならましかば」「人並みでない中将の君と浮舟母娘の身分を思い悩んでいる。くわえて、この叙述が母中将の君の心内語を語る叙述であることに留

意したい。鈴木裕子氏は、ここでの中将の君の「数ならぬ」の意識について、受領の妻となつた自身への悲しみを読み取っているが、このような母の自らに対する痛恨の思いが、そのまま娘への思いとなっていく。一方、高貴人薫に求められることに對してわが身の出自を嘆くことなども含め、物語に語られてからしばらくの間、浮舟の心中はほとんど語られてはいない。

⑤も中将の君の心内を語る叙述である。八の宮からわが身は人数にも思つてはもらえなかつたことを思うのである。ここでは、中将の君から発せられる「数ならぬ」との意識が、浮舟の「人笑へ」回避への思いへと移行していることに注視したい。このようにな中将の君の浮舟への意識は、この後もくり返し語られている。

⑥は中将の君から中の君へ、浮舟庇護の依頼である。ここでの「数ならぬ」との言葉には、表向きは中将の君から中の君への卑下の意となつているが、浮舟をどうにかしてやりたい、との思いの表れとなつている。このように中将の君の「数ならぬ身」との思いは、常に娘である浮舟への思いと結びついているのである。

⑦も中将の君から中の君へ、浮舟庇護の依頼の言葉である。弁の尼から、薫が大君の代わりに浮舟を所望していると聞いている。その理由は浮舟が大君の異母妹であるためである。ただしそこには常に、母の身分が低いことに起因する薫と浮舟の身分差に対する危惧が内在するのである。

⑧は薫の申し入れを中の君より伝えられ、それに答える中将の君の言葉である。浮舟を薫へ。母中将の君の「数ならぬ身」との思いは、薫という高貴な男君からみれば、わが娘浮舟は下仕え程度となるかもしれないとの意識も語られている。

⑨は浮舟失踪後の母中将の君の言葉である。浮舟の心細さ、それは母であるわが身が「数ならぬ身」だからなのだ、とある。

⑩も中将の君から薫への言葉である。自分は人並ではない身分であるため、それは薫と浮舟との関係へと結びつくとする。人にはわが娘浮舟と薫が縁あつてそのような仲であつた、とは知らせてはいないと述べている。これも中将の君の言葉をとおして、薫と浮舟の身分差が転写されている表現である。

浮舟に関する「数ならぬ」の用例は以上である。浮舟をめぐる「数ならぬ」の用例は東屋巻において最も多く見受けられ、蜻蛉巻においてふたたび見受けられるようになる。

なお⑪は浮舟喪失を堪える薫に対する小宰相の君の歌に「数ならぬ身」との表現が見受けられる。小宰相の君は女房であるから、浮舟とはほぼ同等の身分であろう。浮舟は、明石の君や中の君と照らし合わせても、薫や匂宮と対峙すれば、その身は「数ならぬ身」であるといえよう。これについて、浮舟は召人程度の人であるとの指摘がある。このことは中将の君が抱く「数ならぬ」の語をとおしても確認できるものである。

浮舟に関する「数ならぬ」の語はすべて浮舟の母を介して発せられる意識であり、浮舟自身から直接発せられてはいない。つまりは、浮舟に関する「数ならぬ」の意識は外から、母から付与されるものといえよう。母中将の君は人並みの身分ではないわが身を嘆き、その自分から生まれた浮舟の身の行く末を案じている叙述において「数ならぬ」の語は見受けられるのである。

中将の君が強く意識したのは、浮舟の異母姉である中の君であつた。しかしその中の君でさえも抱いている「数ならぬ」との

意識が、直接浮舟から発せられることはない。これはたとえば明石の君が自ら「身のほど」や「数ならぬ身」という意識を抱いて思い悩んでいることは、異なったものであるといえよう。自身に対して「数ならぬ」の意識を抱いていないことが、浮舟の特徴を浮き彫りにしているともいえるのではないだろうか。

浮舟自身が抱くべきはずの「数ならぬ」との意識を母中将の君が抱え込み、浮舟自身はその意識を持つ役割を与えられてはいない。これは、秋山氏や鈴木氏が指摘する浮舟の人物造型の特徴を、「数ならぬ」の語をとおして確認できるものだと考えられる。

二 「身のほど」の意識

これまで、浮舟は「数ならぬ」の意識を内包していないことを、その意味についても検討した。「数ならぬ」とは「とるに足りないわが身」を嘆く意識とするならば、同様の意で用いられている語に「身のほど」の語がある。『角川古語大辞典』には、「①その身分・立場・能力などの程度。分際。平安末期ごろから「身のほど知らず」の形が現れる。②特に、自己の置かれている劣った身の上。境遇。③一般に、社会的な身分・地位。」と説明されている。ここでは主に②の用例について詳細に検討する。

「身のほど」の語は、『源氏物語』作中においては、三八例が確認できる。内訳は、空蟬一例、夕顔の父一例、明石の君十一例、光源氏五例、明石の入道一例、藤壺の宮一例、夕霧三例、紫の上一例、柏木二例、匂宮二例、弁の尼二例、薫五例、中将の君三例である。この用例数を外観すれば、明石の君に関わって用いられ

ている語として、その特徴性を見出すことができよう。くわえて、「身のほど」の語は、草紙地において光源氏や藤壺などを語る際には「御身のほど」とあり、この場合には「高貴な身分」を表しているものである。たとえば光源氏から臘月夜へ語られた言葉に、いみじく忍びて参らむ。今はさやうの歩きもところせき身のほどに、おぼろけならず忍ぶべきことなれば、

(若菜上④七八)

とある。「今はさやうの歩きもところせき身のほどに」とは、光源氏自身、昔のようにたやすく微行などできない高い身分であることを述べている。それにも関わらずこうしてあなたに逢いに來たのだ、と光源氏は臘月夜に思いを伝えており、「ところせき身のほど」は光源氏の思いの強さを表す語として機能しているともいえよう。このような表現は、匂宮についても見受けられる。

限りある御身のほどのよだけさを、厭はしきまで心もとなしと思したれば、
(橋姫⑤一五五)

世に咎めあるばかりの心は何ごとにかはつかふらむ。ところせき身のほどこそ、なかなかなるわざなりけれ」とて、

(総角⑤二七七)

これら、匂宮に関する「身のほど」の用例は、どちらも皇子である匂宮の高貴な身分では女君たちのもとへ通うことが容易ではない意を表している。匂宮に関する「身のほど」も光源氏の用例と類似し、「高貴な身分」ゆえの微行の困難さを表している。

さて、明石の君については阿部秋生氏によって指摘がなされているように、「身のほど」の語はこの人の人物造型に大きく関わって用いられている¹¹⁾。

明石には御消息絶えず、今はなほ上りぬべきほどのたまへど、女はなほわが身のほどを思ひ知るに、こよなくやむことなき際の人々だに、なかなか、さてかけ離れぬ御ありさまのつれなきを見つつ、もの思ひまさりぬべく聞くを、まして何ばかりのおぼえなりとてかさし出でまじらはむ、この若君の御面伏せに、^Ⅰ数ならぬ身のほどこそあらはれぬ。^Ⅱたまさかに這ひ渡りたまふついでを待つことにて、^Ⅲ人笑へにはしたなきこといかにあらむ、と思ひ乱れても、また、さりとて、かかる所に生ひ出で数まへられたまはざらむも、いとあはれなれば、ひたすらにもえ恨み背かず。

(松風②三九七—三九八)

これは、都の光源氏から明石の君へ上京を催促する叙述である。Ⅰは明石の君が自認する光源氏との身分差を表しており、それによる光源氏からの処遇を想定するのがⅡである。ⅠとⅡは明石の君の心内において対応関係にあることがわかる。光源氏との身分差から生じる自身の処遇(Ⅰ・Ⅱ)がⅢ「人笑へ」の語へと繋がり、この「人笑へ」への危惧のために「思ひ乱れ」ている。つまりⅠ・Ⅱ・Ⅲは明石の君の心中において、それぞれに呼応しているものであり、「人笑へ」回避のために明石の君はその身の処し方を徹してみせるのである。

明石の君が「身のほど」の意識を内包する時、そこには光源氏とわが身、くわえて光源氏の妻妾たちとわが身との距離を測る、またはある一定の距離を保つための身の処し方、方法として「身のほど」の語が機能していると解釈することが出来るのではないだろうか。つまり「身のほど」とは、高貴な相手と自身との〈距

離を測る意識〉であるといえる。作中、「身のほど」の意識を抱き、苦悩する姿を最も多く付与された明石の君をとおして、「身のほど」の語は相手との〈距離〉の意識を表しているものであることを、ここでは押さえておきたい。

三 浮舟と「身のほど」

では、浮舟の「身のほど」はどのように語られているのだろうか。ここからは、浮舟に視点を転じて考えてみたい。

浮舟の人物造型及び表現構造については、三田村雅子氏が浮舟の周囲にある〈音〉に着目し、「これといつて意志表示をしない彼女が、一方で、徹底して〈音〉を聞き続ける存在として造型されていることにある」と述べている。この三田村氏の指摘をふまえて原岡文子氏は、「浮舟の巻で薫と匂宮との間を揺れる心の動きをみせるようになる以前、浮舟の内面は殆ど語られることがないと言つてよい。噂話、垣間見、そして中将の君をめぐる動き、という外側の情報の中から水のように透明な、一人のあえかな女君が浮かび上がるのである」と指摘する。このような「意志表示をしない」あるいは「内面は殆ど語られることがない」浮舟を動かし、将来を決定づけていくのは、浮舟の母中将の君であり、浮舟の意思や感情は、母中将の君の言葉や行動によって表出され得るものである。

さて、薫が浮舟を所望した理由は、大君の形代として浮舟を処遇しようとしたためである。浮舟は都から宇治へと、薫に誘われて身を移した。しかし、京から宇治へ薫が頻繁に通うことはない。

その理由は以下のように語られている。

A かの人は、たとしへなくのどかに思しおきてて、待ち遠なりと思ふらむと、心苦しうのみ思ひやりたまひながら、ところせき身のほどを、さるべきついでなくて、かやすく通ひたまふべき道ならねば、神のいさむるよりもわりなし。されど、いまいとよくもてなさんとす、山里の慰めと思ひおきてし心あるを、すこし日数も経ぬべきことどもつくり出でて、のどやかに行くとも見む、さて、しばしは人の知るまじき住み所して、やうやう、さるかたにかの心をものどめおき、わがためにも、人のもどきあるまじく、なのめにてこそよからめ、にはかに、何人ぞ、いつよりなど聞き咎められんもの騒がしく、はじめの心に違ふべし、また、宮の御方の聞き思さむことも、もとの所を率て離れ、昔を忘れ顔ならん、いと本意なし、など思ししづむるも、例の、のどけさ過ぎたる心からなるべし。渡すべきところ思しまうけて、忍びて造らせたまひける。

(浮舟⑥一〇六一—一〇七)

浮舟のもとへたやすく通わない理由を、自身が「ところせき身のほど」であるからだとする。薫の心内語を語る叙述にある「ところせき身のほど」は、先に確認したように光源氏や匂宮の場合と類似して高貴な身分ゆえとの意であるが、そこから自身と浮舟との身分差ゆえに浮舟のもとへ頻繁に通わない理由へと、薫の意識が移行していくところが注視される。

くわえて、ここでは薫の心内語に「かの人は、たとしへなくのどかに思しおきてて」「すこし日数も経ぬべきことどもつくり出でて、のどやかに行くとも見む」など、「のどか」や「のどやか」

の語がくり返し用いられている。薫のこのような心持ちを、語り手は「例の、のどけさ過ぎたる心からなるべし」と、薫の性質だと述べている。この草紙地については、たとえば『新全集』頭注において、当該場面より前からくり返し作中に語られていることが指摘されている。

ただ、ここでは浮舟のもとへ頻繁に通わない理由、また高貴な自身が浮舟に逢う口実を設けることに関する薫の心内において、頻繁に「のどか」の語が見受けられることの意味を問うてみた。薫の浮舟に対する「のどか」との態度は、薫の心内における浮舟という人の処遇を表す語として捉えられないだろうか。つまり、「ところせき身のほど」の薫が浮舟へ頻繁に逢うに行くことはなく、自分の訪れを待っているであろう浮舟の心中を考えないでもないが、それでも「のどか」に構えてもよい、浮舟の「身のほど」を表しているのではないだろうか。浮舟に対する薫のこのような意識は、次の叙述においても見受けられるものである。

B 「御心ばへの、かからでおいらかなりしこそこのどかにうれしかりしか。人のいかに聞こえ知らせたることかある。すこしもおろかならむ心ざしにては、かうまで参り来べき身のほど、道のありさまにもあらぬを」など、朔日ごろの夕月夜に、すこし端近く臥してながめ出だしたまへり。男は、過ぎにし方のあはれをも思し出で、女は、今より添ひたる身のうさを嘆き加へて、かたみにもの思はし。

山の方は霞隔てて寒き洲崎に立てる鵲の姿も、所がらいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはるばると見たさるるに、柴積み舟の所どころに行きちがひたるなど、ほかに目馴れぬ

ことどものみとり集めたる所なれば、見たまふたびごとに、
なほ、その昔のことのただ今の心地して、いとからぬ人を見かはしたらむだに、めづらしき中のあはれ多かるべきほどなり。

(浮舟⑥ 一四四—一四五)

薫から浮舟へ語られる言葉の中に、「かうまで参り来べき身のほど」との語がある。これは、「あなたをおろそかに思っていない証拠に、ここまで逢いに来るのはたやすくはない身分だが、逢いに来ていてではないか」と、浮舟を慰める意として語られている。しかし薫のこの発言は、たとえば光源氏が朧月夜へ語りかけた「ところせき身のほど」に類似しているかのようにも見受けられるが、一方では、明石の君に関する「身のほど」の語と類似して、自身と浮舟との身分の差を表しているともいえる。

この時浮舟は薫と匂宮との間で揺れ動き、思い悩んでいた。薫は「男は、過ぎにし方のあはれをも思し出で」、浮舟をとおして大君への思いを自らの中に抱き、一方の浮舟は「女は、今より添ひたる身のうさを嘆き加へて、かたみにもの思はし」、薫の言葉を受けて、さらに思い悩む様子である。この時薫と浮舟は同じ場所にながら、二人の心は乖離している。

くわえて、ここには先にあげたAの薫の心内に見られた「のどか」の語、さらに「身のほど」の語が、他でもない浮舟へと語られたことにその意味がある。薫の心内において見受けられた「のどか」と「身のほど」が、Bでは浮舟へと発せられる時、そこから何が読み取れるだろうか。

浮舟は「数ならぬ」の意識と同様に「身のほど」との意識をも、自らの中に内包していない存在である。しかし、浮舟に関す

る「身のほど」の語は「数ならぬ」の語とは違い、他者から浮舟へと発せられる言葉の中に表れていることが特徴的である。くわえて、「身のほど」の語は、浮舟にとって身の拠り所であるはずの薫から発せられている。薫は浮舟に、「かからでおいらかなりしこそどかにうれしかりしか」と語る。薫が浮舟に望むのは「のどか」な様、薫の他の女君たちの事など特に気にせず、「のんびりとしている」時の方が良かった、というのである。つまり浮舟は薫にとって公にせずとも良い人、その程度の人なのであり、それが薫と浮舟の「身のほど」ということである。

「身のほど」の意識を内包していない浮舟に薫から「身のほど」の語が発せられる時、そこには浮舟が自らの中に意識していない、薫との〈距離〉が突き付けられているともいえよう。薫から「かうまで参り来べき身のほど」と語られても浮舟が慰められることはなく、さらに思い悩むこととなるのである。

薫は浮舟と同じ時を過ごしながら「なほ、その昔のことのただ今の心地して」と、大君への思いを抱いたままである。浮舟その人を見つめるのではなく、大君へと思いを馳せたままであり、あくまでも浮舟は形代であることが語られている。Bの叙述の続きには「女はかき集めたる心の中にもよほさるる涙とすれば出で立つを、慰めかねたまひつつ」とあり、浮舟の物思いの深刻な様と、それを慰めることも出来ない薫が描かれる。また浮舟の様子について抱いた思いには、

しばしも立ちとまらまほしく思さるれど、人のもの言ひのやすからぬに、今さらなり、心やすきさまにてこそ思しなして、
暁に帰りたまひぬ。

(浮舟⑥ 一四六)

とあり、浮舟に情愛の増す思いを認識しながらも世間の目を気にし、夜明け前には京へと帰ることが語られる。薫のこのような態度を浮舟がどのように感じているのかについては、語られてはいない。ただ、浮舟を慰めきれないことや浮舟の傍にとどまろうとしない薫の姿が語られているのである。浮舟の心情が薫の言葉や態度、さらに言えば薫の存在によって救われるのではなく、より薫と匂宮の間で惑わされ続けるのである。

また先にあげた叙述には、「鵲」や「宇治橋」の語がある。これについて吉井美弥子氏は、浮舟物語において七夕伝説に関わる表現が散見することを想定しながらも、その実これらの表現は「織女」たりえない浮舟を位置づけるものであることを指摘し、次のように述べている。¹⁵⁾

浮舟は、確かに宇治十帖後半部における女主人公というべき人物ではあるけれども、薫にとつて一匂宮にとつてはいうまでもなく一いわば問題にすべき対象ではない立場の女性であつたという状況がより明確に照らし出されていると考えられるのである。

この指摘は、薫から「のどか」と構えられる浮舟の立場についても通底するものと考えられる。さらにここで考えたいのは、薫から「身のほど」の語を発せられ、〈距離〉を突き付けられるという、浮舟物語に固有の表現方法である。まぎれもなく薫から、高貴な自身とは〈距離〉を置く人、と捉えられている浮舟自身から、その「身のほど」を嘆く言葉が発せられてはいないのである。

では浮舟が「身のほど」の意識を内包していないとは、そこにはいったいどのような表現方法が想定でき得るのであろうか。浮

舟に関する「身のほど」の意識は、薫から発せられるのみではなく、「教ならぬ」の意識と同様、母中将の君と密接に関わっているようである。

C「常陸殿のまかでさせたまふ」と申す。若やかなる御前ども、「殿こそあざやかなれ」と笑ひあへるを聞くも、げにこよなの身のほどやと悲しく思ふ。
(東屋⑥五八)

ここでは中将の君自身のことについて、身のほどを悲しく思っているところ。中将の君のこのような自認は、やがて娘である浮舟の行く末を決定づけていくこととなる。

Dやむごとなき御身のほど、御もてなし、見たてまつりたまへらむ人は、いますこしなめならず、いかばかりにてかは心をとどめたまはん、(中略)当代の御かしづきむすめを得たてまつりたまへらむ人の御目移しには、いともいとも恥づかし、つましかるべきものかな、と思ふに、すずろに心地もあくがれにけり。
(東屋⑥八一—八二)

これは中将の君の心内語を語る叙述である。「やむごとなき御身のほど」とは薫のことである。左近少将を浮舟の婿にと考えていた中将の君の心中が薫へと移行していく一方で、ここでは薫や匂宮の高貴さと、わが娘浮舟との身分差への意識も同時に語られている。心は惑うが、中将の君は浮舟の異母姉である中の君を仲介として、浮舟を薫と娶わせることを決断するのである。

このようにつたないわが身を嘆く「身のほど」の意識は、確かに浮舟の母中将の君に確認できた。さらに中将の君の心内においては、薫とわが娘浮舟の「身のほど」の差を懸念する意識もあつたはずである。中将の君の「身のほど」の自認は、浮舟を薫と娶

わせた後の浮舟巻においても語られている。浮舟に関わって発せられた「身のほど」が語られる次の場面を見てみよう。

E「心地のあしくはべるにも、見たてまつらぬがいとおほつかなくおぼえはべるを、しばしも参り来まほしくこそ」と慕ふ。

「さなむ思ひはべれど、かしこもいとの騒がしくはべり。

この人々も、はかなきことなどえしやるまじく、せばくなどはべればなむ。武生の国府に移ろひたまふとも、忍びては参り来なむを。なほなほしき身のほどは、かかる御ためにこそいとほしくはべれ」など、うち泣きつつのたまふ。

(浮舟⑥一六九)

浮舟に関する「身のほど」の語は、母中将の君から直接浮舟へと発せられている。久方ぶりの母との再会であったが、この時浮舟は薫と匂宮との仲について思い悩み、いよいよ追い詰められていた。帰ろうとする母に、せめてすこしの間でも傍にいたい、と訴えた浮舟に対し、母はかならずまた自分から娘に会いに来ることを述べる。この場面について中嶋朋恵氏は、

「参り来」は、貴人のもとに参上することをいう語だが、浮舟が「参り来まほし」と母のもとに参上したいと言ったのに対して母は「参り来なむ」といいえ私の方が参りましよう」と、強い意思を表す。同じ「参り来」の語が用いられるところに、母のもとへは行けないのだという現実が立ちあふさがる感じが強くする。

と述べ、「参り来」の語を介して母と娘の現実に関する指摘がなされている。また、たとえば『玉上評釈』が、「武生の国府」の語についての『催馬楽』引用を指摘しており、この場面における

中将の君の発話が、浮舟を追い詰めていく言説であるとの施注がなされている。

ここではそれらの指摘にくわえて、中将の君が発した「なほなほしき身のほど」の語に注目したい。母は「私から会いに来る」と述べるが、母自身のことを「なほなほしき身のほど」とも述べている。これは薫の相手となった浮舟と、自身の身分は違うことを表出しているものである。中将の君の言葉には単に「参り来」の語ではなく「忍びて」とあり、続けて「なほなほしき身のほど」との言葉に見出される、娘とは違う「わが身のほど」との意識がある。上の言葉を受けて「かかる御ためにこそいとほしくはべれ」、あなたのためには何もしてやれないと言う。「身のほど」の違いに徹した意識の言葉の中において、浮舟は母中将の君から「身のほど」の語を発せられていることになる。この場面について鈴木裕子氏は、以下のように述べている。¹⁸⁾

心から娘の幸せを願いつつ、その実、娘の真情からは遠いところにおいて、無意識の内に娘を「幸せ」から遠ざけている、という皮肉なありようとなっている。これらの母の言動に、娘が幸せを掴みつつあるという確信から生じる、母の無意識な〈嫉妬〉の様相を読み合わせたら、それは奇異に過ぎると言われるだろうか。

氏はくわえて、浮舟と中将の君の母娘の関係を「夢の実現を重ねながら一体化していた娘」とも述べている。「一体化していた娘」に発した「身のほど」の語は、「娘の真情からは遠いところに」いる中将の君を、象徴的に表出しているといえよう。氏はこれを「母の無意識な〈嫉妬〉の様相」と解している。確かに「一体化

していた娘」への発話であることを鑑みれば、中将の君の発話には「矛盾」を読みとることができようか。しかし、ここでは「母の無意識な（嫉妬）の様相」と捉えるのではなく、母から「身のほど」の語を発せられる浮舟の人物造型に関わって、その意味を解釈してみたい。

三田村雅子氏は先の場面について、周囲の「音」を取り込みながら浮舟の心中を強く揺さぶる語りの方法であると述べ、さらに浮舟をめぐる言説について、女房たちの会話、宇治川の〈音〉、母中将の君の発話などを徹して聞く浮舟の姿と、それによって追い詰められていく浮舟の在り方を指摘している。¹⁹⁾

浮舟は先にあげたEの叙述において、母の傍にいたい、と自らの思いを口にした。しかし母自身の「身のほど」を考えて、との言葉を母から発せられた時、浮舟と中将の君の間にある〈距離〉が浮き彫りになったのである。ここではEの叙述における「身のほど」の語も、中将の君の発話によって追い詰められる浮舟をめぐる言説の一つとしてとりあげても良いのではないだろうか、との問いを立ててみたい。浮舟自身が抱くことなく、庇護を頼む薫と、心の拠り所とする母中将の君から「身のほど」の語を発せられる浮舟の特徴を、ここに見出せるのではないだろうか。「身のほど」の意識が貴人とわが身との間にある階級差を痛切に意識させるものであるとすれば、中将の君から浮舟への発話にある「身のほど」からは、何が読み取れるのだろうか。

Dの叙述で確認したように、そもそも中将の君の「身のほど」との意識は、薫と自身の（浮舟を含む）身分差に対するものであった。だがEにおいて母が発した「身のほど」の語は、薫に比

すれば取るに足らないわが身のほどとの意であるが、ここでは薫の側に浮舟が含まれていることになる。母の意識の中で浮舟はすでに、薫の傍に身を置く人となっているのである。

Eにあげた叙述は、浮舟のもとへ母中将の君が訪ねて来た場面である。母が訪ねて来たきっかけは、以下のようにある。

大将殿は、四月の十日となん定めたまへりける。さそふ水あらばとは思はず、いとあやしく、いかにしなすべき身にかあらむと、浮きたる心地のみすれば、母の御もとにしばし渡りて、思ひめぐらすほどあらむと思せど、（中略）母ぞこち渡りたまへる。
（浮舟⑥ 一六三—一六四）

薫の誘いのままに京へ迎えられようなどとは思はず、苦悩する浮舟は母のもとに身を寄せたいとすがった。だが状況が許さず、母が浮舟のもとへ来たのであった。浮舟は薫と匂宮の間で惑乱する心の中で母を思慕している。「さそふ水あらばとは思はず」浮舟の心内には薫のもとへ行く気にはなれない、代わりに母の傍にいたいとある。しかし何度も母の傍にいたいと願う浮舟に対して母が口にした「身のほど」の語は、鈴木氏の述べる「母子一体」であったはずの娘の「身のほど」を薫の側へと据え置くものである。浮舟を母から剥離させ、孤立させるものとして機能しているのである。心の拠り所としてきた母から「身のほど」の語を発せられた時、浮舟は母との〈距離〉を突き付けられたことになるのではないだろうか。

さて、先にあげたEの場面の前後には、母への思慕にくわえて、浮舟のある思いが語られている。「人笑へ」の危惧である。

君は、けしからぬことどもの出で来て、人笑へなれば、誰も

誰もいかに思はむ、(中略) いかにせむ、と心地あしくて臥したまへり。(浮舟⑥ 一六四)

母中将の君の、浮舟が薫によつて京へ迎えとられることへの得意げな語りを浮舟は聞く。浮舟の心中を支配しているのは、薫と匂宮二人の男君と関係を持ったこと、その露呈がもたらす「人笑へ」の危惧である。浮舟の様子を氣にかけながらも母の語らいはさらに続いていき、匂宮の好色なことを聞いた中将の君は、浮舟との縁があるようならば、「また見たてまつらざらまし」など、言ひかはすことともに、いと心肝もつづれぬ(浮舟⑥ 一六七)二度と娘には会わないと語る。母の言葉に浮舟は肝のつぶれる思いである。母と女房との語らいはさらに続き、浮舟はその会話を聞き続ける。

ながらへて人笑へにうきこともあらむは、いつかそのもの思ひの絶えむとする、と思ひかくるには、(中略) 親のよろづに思ひ言ふありさまを、寝たるようにてつくづくと思ひ乱る。

(浮舟⑥ 一六八)

浮舟の心は密事の露呈とそれに伴う「人笑へ」についての阻止へと向かつていくのである。ただしこの時点では「つくづくと思ひ乱る」とあり、その「決意」の固まった様ではない。

中将の君から「身のほど」との発話を受けた浮舟の心中は語られていない。だがこの「身のほど」の言葉を母から発せられたことにより、さらに浮舟は追い詰められることになる。浮舟の心中にはこの後、自らその身を宇治川へと誘おうと考える際、

親もしばしこそ嘆きまどひたまはめ、あまたの子どもあつかに、おのづから忘れ草摘みてん、ありながらもてそこなひ、

人笑へなるさまにてさすらへむは、まさる思ひなるべし、などと思ひなる。児めきおほどかに、たをたと見ゆれど、氣高う世のありさまをも知る方少なくて生ほしたてたる人にしあれば、すこしおずかるべきことを思ひ寄るなりけむかし。

(浮舟⑥ 一八五)

うきさまに言ひなす人もあらむこそ、思ひやり恥づかしけれど、心浅くけしからず人笑へならんを聞かれたてまつらむよりはなど思ひつづけて、

なげきわび身をば棄つとも亡き影にうき名流さむことをこそ思へ

親もいと恋しく、例は、ことに思ひ出でぬはらからの醜やかなるも恋し。(浮舟⑥ 一九三)

と、くり返し「人笑へ」の語が見受けられ、また母への思いも語られている。しかしここで語られるのは、母のそばで「思ひ乱る」つまり思い乱れていた心理状況ではなく、すでに「思ひなる」すなわちそのように思う、とあつて、母は浮舟を思いとどまらせる機能を果たしていない。

そもそも浮舟にまつわる「人笑へ」の語は、東屋巻において乳母から「あが君は人笑はれにてはやみたまひなむや」と、世をやすげに言ひぬたり(東屋⑥ 六八)と語られ、母からも「便なきことも出で来なば、いと人笑へなるべし。あぢきなし」(東屋⑥ 七七)とあるように、外から付与された言葉であった。それがやがて浮舟の心内に見受けられるようになる。これについて原岡文子氏は、「ゆくりなく負わされた「人わらへ」の状況から、「人わらへなら」ぬ展開へ、運命の逆転を求めることが、浮舟に対する

期待でもあり、また周囲の人々の至上命令でもあったと述べられようか」とし、その機能については、「人笑へ」の危惧をバネに生き蘇る正編の女君に対し、宇治の女君たちは「人笑へ」を鍵語としておおよそ負の方向へ運命を紡いでいく」と述べる。

浮舟に関する「数ならぬ」「身のほど」「人笑へ」の語は、外から浮舟へ付与された語であり、そのうち浮舟自身が抱くようになるのは「人笑へ」の意識のみである。そのため、「数ならぬ」「身のほど」「人笑へ」の語は、浮舟にまつわる言説においては個々にその語が用いられる意味が異なっている。つまりは先述した松風巻における明石の君の言説とは違い、それぞれの語が浮舟の身の処し方について連関して作用していかないのである。ただ、一部ではあるが「数ならぬ」身であると自認する母の意識の中において、浮舟が「人笑へ」とならぬよう危惧する中將の君の心中が語られている。ここに、「数ならぬ」の意識によって導き出される「人笑へ」の語との関連性を見出すことができる。この母の思いが、浮舟を導いてきたはずであった。

原岡氏の述べるのとおり、「人笑へ」の語が浮舟の身の処し方に関わって、彼女に生き抜く力を抱かせる語として機能してはいない。ひとつには、「身のほど」の語を母が発したがために浮舟が母から剥離され、それまで浮舟を導いてきた母がその役割を失ったこと²²。そこにその誘因を見出すことができようか。それにより浮舟の抱く「人笑へ」の語が負の方向へと作用してしまうという構造が、想定できるのである。

「さそふ水あらばとは思はず」、薫のもとでもなく、また母から「身のほど」の語を発せられた浮舟が向かう先は、ただ一つの

道のようなのである。浮舟失踪後の周囲の人々の動転と、浮舟自身の心内描写は、蜻蛉巻、手習巻において語られる。

母から娘へ「身のほど」の意識が語られることは、明石の君と姫君との関係においても見受けられるものである。「もとより、御身に添ひきこえさせむにつけても、つましき身のほどにはべれば、譲りきこえそめはべりしを」(若菜上④一二三)后がねとして育てられ今は東宮妃となった娘に対し、母である明石の君は、「あなたを養育するような身のほどではないゆえに、紫の上へお譲りしたのだ」と語る。ここでも実の母と娘の間には〈距離〉があることが語られているが、これは自身の出生の際のことを聞いた姫君を慰めるための、母からの語りかけである。薄雲巻において姫君の養育を譲渡してからこれまで、明石の君は徹して、光源氏や紫の上だけではなく姫君とも距離を置いてきたのである。

中將の君から浮舟に語られた「なほなほしき身のほど」との言葉は、明石の君と類似して「自分があなたの傍にいたら障りになるでしょうから」との意であった。では母が取ろうとしている〈距離〉とは、いったい何であろうか。

鈴木日出男氏は、浮舟物語における男たちの妻争い伝承の影響と、物語の構造に要請されて浮舟の「人笑へ」の意識が導き出されること、また「人笑へ」から浮舟が選びとった道は伝承から離脱され、「美化」されないものであることを指摘し、

醜聞のきびしく問われることもなかった。しかしながらそのことは、浮舟が薫や匂宮にとつて瞬時関わっては忘れ去られる、いわゆる召人以上ではなかったというきびしい現実を意味することにもなる。

と述べている。²³⁾つまり、浮舟は「数ならぬ」身であることに変わりはなく、浮舟が危惧した「人笑へ」は、「きびしく問われること」もない結果となった。氏のこのような指摘は、また一方では、浮舟が薫や匂宮に対して「数ならぬ」や「身のほど」の意識を内包していなかったこと、そしてこれらの語が母から付与される時、そこに浮舟の「身のほど」の流動性があることも大きく関わっているものと考えられる。

中将の君が薫と浮舟を娶わせようと考えた際に抱いた、薫と浮舟との「身のほど」の不安。その「身のほど」は、薫の心内語や発話を検討する限り、はじめからならその〈距離〉は縮まっていはいないのである。そうであるにも関わらず、中将の君が浮舟に発した「身のほど」の語は、薫と浮舟の「身のほど」に関する中将の君の認識の齟齬を呈して見せ、なんら変わっていない母と娘の「身のほど」、つまりは〈距離〉を示してしまっているという、皮肉な発話であるともいえよう。

おわりに

これまで、浮舟に関する「数ならぬ」と「身のほど」の意識について、明石の君と中将の君をとおして検討してきた。

「数ならぬ」の語は、母中将の君が浮舟に関わって常に抱き続けた意識であった。浮舟自身が抱くのではなく、母が抱き続け思案するという、浮舟にまつわる表現に特有のものである。また同様に「身のほど」の意識も浮舟が自認することはないが、この言葉と薫と中将の君から直に発せられるという、浮舟の在り方を表

出しているものと解することができよう。

浮舟に関する「身のほど」の語が表出するものは、相手との〈距離〉であり、その〈距離〉が変わることはない。しかし、母中将の君の発話にある「身のほど」の語は、薫と浮舟の〈距離〉、母と娘の〈距離〉に対する認識の齟齬をも呈している。浮舟を導いてきた母中将の君のこのような認識の誤りは、浮舟を追い詰め、やがて浮舟と薫の関係を破綻へと導いていく語として機能しているともいえよう。明石の君に多く見出される「数ならぬ」と「身のほど」の語が、明石の君と明石一族の繁栄へと導く一つの鍵語だとするならば、浮舟に関する「数ならぬ」と「身のほど」の語は、明石の君のそれとは対照的に機能しているのである。

注

- (1) 阿部秋生「明石の君の周囲」〔『源氏物語研究序説』東京大学出版会、一九五九年〕七六二・七六三頁。
- (2) 前掲1阿部論文。
- (3) 以下『源氏物語』本文は『新編日本古典文学全集』より引用した。(一)内は、巻名・巻数・頁を示している。
- (4) 秋山虔「浮舟をめぐるの試論」〔『源氏物語の世界』東京大学出版会、一九六四年〕二五一頁。
- (5) 鈴木日出男「中将の君と浮舟」〔『源氏物語虚構論』東京大学出版会、二〇〇三年〕一〇七四頁。
- (6) 高田祐彦「中将の君の身分意識をめぐる――浮舟物語の序章――」〔『源氏物語の文学史』東京大学出版会、二〇〇三年〕。
- (7) 鈴木裕子「母と娘」の物語―その崩壊と再生―〔『源氏物語』を「母と子」から読み解く〕角川書店、二〇〇五年〕二一

六頁。

- (8) たとえば、三田村雅子「召人のまなざしから」(『源氏物語感覚の論理』有精堂、一九九六年) など。

- (9) 『角川古語大辞典』(角川出版、一九八四年)。

- (10) 前掲注1、阿部論文。

- (11) 前掲注1、阿部秋生『源氏物語研究序説』など。

- (12) 三田村雅子「〈音〉を聞く人々―宇治十帖の方法―」(前掲注8に同じ) 一五〇頁。

また、薫の「出生という最も基本的な所での自己同一性を欠いている人物として設定されている」ことに関わって、浮舟は「薫の状況と重なってしまうという意味で、薫の鏡象的な関係にあるといってもよいであろう」とも指摘している。

- (13) 原岡文子「雨・贖罪、そして出家へ」(『源氏物語の人物と表現 その両義的空間』翰林書房、二〇〇三年) 五二〇頁。

- (14) 浮舟の端近に関しては、吉野瑞恵「端近」なる女君たち―女三の宮と浮舟をめぐる―(『王朝文学の生成 源氏物語』の発想・「日記文学」の形態) 笠間書院、二〇一一年) に指摘がある。浮舟をめぐる端近の問題については、稿を改め考えたい。

- (15) 吉井美弥子「浮舟物語における七夕伝説」(『読む源氏物語 読まれる源氏物語』森話社、二〇〇八年) 二七〇頁。

- (16) 石壁敬子編『国文学「解釈と鑑賞」別冊 源氏物語の鑑賞と基礎知識 浮舟』(至文堂、二〇〇二年) 鑑賞欄「母との別れ」一八三頁。

- (17) 玉上琢彌『源氏物語評釈第12巻』(角川書店、一九六五年) 一三九頁。

- (18) 前掲注7 鈴木論文、二三八頁。

- (19) 前掲注12 三田村論文。

- (20) 前掲注7 鈴木論文、二三九頁。

- (21) 原岡文子「浮舟物語と「人笑へ」」(前掲注13に同じ) 四八八・四九二頁。

- (22) たとえば前掲注7 鈴木論文や吉井美弥子「浮舟と父八の宮」(前掲注15に同じ) は、浮舟が母と離れはじめるのは匂宮との一件からであると指摘する。吉井氏は「匂宮との件を契機として、浮舟にとって「母」に対して距離が置かれるようになって初めて浮舟が「母」を他者として意識し、その上で慕う思いが生じたことを意味するのではないだろうか」と述べる。確かに、母が推す薫ではなく匂宮に惹かれていく浮舟の心理について留意すべきではあるが、述べてきたように、ここでは薫と匂宮との仲に悩む浮舟が母の傍にいたいと思慕しているにも関わらず、「身のほど」との言葉を母から発せられることにより、浮舟が母から離されたと考える。

- (23) 鈴木日出男「浮舟の入水 薫と浮舟(一)」(前掲注5に同じ) 一一〇五頁。なお初出は「浮舟物語試論」(『文学』一九七六年三月)。